

禅林寺永観堂

神村ふじを

何年も前の夏に一回訪れたことはあったのだが、紅葉の時期に永観堂の見回り阿弥陀を拜んでみたいと思い、京都に出掛けることにした。十一月初めのことである。改めてこの時期に京都に行くことが間違いだっただと戻ってから思ってしまった。

普段でも観光客しかも外国人が多いとは思っていたが、殺人的な多さで有名どころの寺院は押し合いへし合い状態。じっくり仏様を拜む余裕などまったくなかった。

しかも、京都に宿を求めることなどできる状態ではなく、ビジホも満杯で泊まる場所を探すのに苦労したのだが、ここまで混んでいるとは思わなかった。

コロナが収まってから宿泊料金が倍以上に値上がりし、インバウンドの外国人も多いために、ホテル業界はすこぶる強気である。それでも京都から二駅の大津まで戻ればビジホも空いていることがわかり、料金も京都ほどではなくリーズナブルであることがわかった。

まあ幾分鉄分が溶け込んでいる我が身としては、山形から京都までの間、沿線の風景を眺めながら、ちびちびとワンカップを口にするだけで、六角精児になったようで幸せな気分になる。

今回の旅行は、ライトアップも行われているとの情報を得て、紅葉と寺院の風情を楽しみたいと思いい、せっかく大津に宿を取ったのだからと、石山寺、園城寺を回り、山科の毘沙門堂、東山の東福寺、真如堂、禅林寺、南禅寺を巡って、大原の三千院、寂光院、そして最後に清水寺に行く計画を立てた。

考えてみると、「夜桜」という言葉はあるが、「夜紅葉」という言葉はない。1990年代に、「ねねの寺」で知られる高台寺でライトアップが始まり、次第に京都中心に広まっていった。だから「夜紅葉」は比較的新しい文化なのである。

紅葉なんてわざわざ見に行かなくても、おまえの周りの山は紅葉だらけじゃないかという声が聞こえてきそうだが、最大の目的は紅葉の中の永観堂に鎮座まします見回り阿弥陀様のご尊顔を拝することなのである。

禅林寺は、京都市左京区永観堂町にある浄土宗西山禅林寺派の総本山。南禅寺のすぐ北にある。本尊は阿弥陀如来（見回り阿弥陀）。本尊が安置されている永観堂が通称となっている。紅葉の名所として知られ、古くから「秋は紅葉の永観堂」と言われている。

当初真言宗の道場として出発した禅林寺は、中興の祖とされる禅林寺七世法主永観律師の時に念

仏の寺へと変化を遂げる。永観は文章博士の源国経の子として生まれたが、浄土の教えに心酔しやがて熱烈な阿弥陀信者となった。禅林寺を永観堂と呼ぶのは、この永観律師に由来する。

永観堂には仏様の御加護を高めるためかどうかかわからないが、よくありがちな七不思議というものもある。それは、方丈孔雀の間の欄間に描かれた抜け雀、永観律師が植えた悲田梅^{ひでんばい}、臥龍廊、三銚の松、木魚蛙、火除けの阿弥陀、岩垣もみじ、である。

中でも方丈の前庭にある悲田梅は、永観が衆生を救うために境内に多く植えていた梅の木の最後の一本で、苔むした小枝を四方に伸ばしている。今も小さな実をつけると言う。樹齢700年の老木は、質素にかつ遠慮がちに庭の片隅に植えられていた。

永観堂の阿弥陀様は立ち姿で上品下生の来迎印を結んでいる。また抱きかかえる気なら抱ける程度の阿弥陀様である。ただほかの阿弥陀様と違うのは、顔はまっすぐ正面を向いているわけではなく、美しい切れ長の目がそつと左下を向いている特異なお姿の像であり、調べればほかにもいらつしやるのかもしれないが、私が知る限り横向きの阿弥陀様はこの「見返り阿弥陀」^{*1}だけである。

この像については次のような言い伝えがある。永保2年（1082）、永観が日課の念仏を唱えながら、阿弥陀如来の周囲を行道していたところ、阿弥陀如来が突然須弥壇から下り、永観と一緒に行道を始めた。驚いた永観が立ち止まっていると、阿弥陀如来は振り返り様に、「永観、遅し」と言ったという。阿弥陀如来像はそれ以来首の向きが元に戻らず、そのままの姿で安置されている

のだと言う。

首の向きが戻らずにそのままの姿でいるところ、誰でもわかるいい加減さ嘘つばさが何となくいい。

小振りな阿弥陀様は、口元に笑みをたたえながら今日も、「永観、遅し」と言っているのだろうが、心の中ではあまりの人の多さに、「何この人たち、ヤバっ」と言っているように感じた永観堂であった。

散紅葉碧眼巡る京の町 ふじを

*1 この随筆を書き上げた段階で、山形県米沢市堂森の善光寺阿弥陀堂に、見返り姿の木造阿弥陀如来立像（県指定文化財）が安置されていることがわかった。見識不足であることを申し訳なく思っています。

* 永観堂ホームページ 阿弥陀如来立像（みかえり阿弥陀） <https://eikando.or.jp/mikameramidat.html>